

片野鴨池で発信機を装着したトモエガモを琵琶湖で確認

日程：平成 24 年 1 月 21～22 日

場所：琵琶湖（滋賀県長浜市）

文責：鴨池観察館友の会 山本芳夫

関連する調査名：モニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査

片野鴨池ラムサール湿地登録面積拡大を目指す加賀市の依頼を受け、鴨池を代表する国内では希少な渡り鳥であるトモエガモの行動調査を行っている。

調査方法は、鴨池で江戸時代から伝統的に行われている坂網（投げ網の一種。鳥体を傷つけないで捕らえられるという利点がある。）でトモエガモを捕まえ、地上用電波発信機を装着・放鳥し、どこで採食しているかを受信専用トランシーバーで調べるというものである。調査メンバーは、鴨池観察館レンジャーを中心に友の会有志計 5 名である。

発信器は、周波数、144.00MHz 帯から 0.03MHz 刻みに 20 台用意し、12 月上旬より装着を始め、現在 144.57MHz までの 20 個体に装着している（2 月 1 日現在）。発信器の電池の寿命は、約 2 か月であり、遅くとも換羽時期までに脱落し、装着による鳥の行動にはさほど影響がないものと思われる。

これまでの調査から、トモエガモは、日中は安全な鴨池などの湖面で休息し、夜になると鴨池近くの半径 15 km の範囲内の湛水した水田で採食すること。個体によっては鴨池近辺の柴山潟でも休息していることが確認された。

時間がたつにつれ、鴨池近辺で受信できなくなった個体があり、受信機の脱落が確認されたものもあるが、他は他の地域に移動したものと思われる。



調査中の筆者（植田氏撮影）

筆者は、過去の首輪標識ヒシクイ調査で移動が確認された琵琶湖に移動しているのではないかと問い、1 月 21 日に湖北野鳥センターで行われるモニタリングサイト 1000 ガンカモ類調査交流会の折に受信専用の 1.8 m ダイポールアンテナと受信機を自家用車に積んで参加した。ダイポールアンテナの受信範囲は、半径約 1 km である。アマチュア無線の車載用アンテナでも半径 500m 程度は受信可能である。

開始時刻 2 時間ほど前に琵琶湖に到着し、湖北野鳥センターの山崎さんにトモエガモについて確認したところ、「600 羽程いますが、風のため、沖の方に出ています。」との返事であった。そこで、アンテナを立てて奥琵琶湖岸を探索した。湖岸に沿って車で大浦まで探索すると、塩津浜で 144.36MHz に微かな入感があった。「まさかっ！」と思いながら再度確認したが、確認できなかった。諦めて次の日の琵琶湖エクスカッションとそれでだめなら終了後に

再度湖岸探索しようと野鳥センターに戻った。

次の日は、朝霧が立ち込め、視界不良。エクスカーションについていきながら湖岸を探索するも反応なし。幸い風いでいて湖上タクシーでのクルージングに望みが繋がった。でも、トモエガモの群れに遭えるとは限らない。ダイポールアンテナを舳先に立て、受信機のダイヤルを回し続ける。竹生島が近くに見えるようになった所で、144.36MHzの



「ピッ ピッ」というパルス信号が微妙に入感。思わず「36 入感！！」と叫んでしまった。でも、あたりを見渡しても姿が見えないうちに聞こえなくなってしまった。どこかにいるとあたりを見渡し、遠くにあるえり漁の定置網あたりかな？と思っていると、エクスカーションのガイドを務める野鳥センターの植田さんが漁師さんをお願いして船をえりに向かわせてくれた。すると

144.36MHz のパルス信号が強くなり、新たに 144.30MHz も入感した。しばらくするとえり付近からカモの大群が飛び立ち、その群れの飛び方から、トモエガモであることを確信し、その中に送信機を付けた 2 羽がいることが分かった。鴨池観察館に確認したところ、36…12月15日♀放鳥、1月16日より不明。30…12月18日♀放鳥1月20日より不明。であった。また、36は、2月1日に戻ってきた。トモエガモが鴨池の大雪で南下するのは推測されていたが、現実に行き来するのを確認できたのは今回が初めてである。

トモエガモ調査は継続中である。シーズン後半の行動と渡りの調査をしていくつもりである。トモエガモの群れが当地に現れた際にはパルス音や発信器アンテナ等も確認して頂けたら幸いである。(連絡先 kamoike@wbsj.org)

最後にガンカモ交流会を準備して下さったバードリサーチの皆さん。エクスカーションを準備・案内して下さった湖北野鳥センターの植田さんはじめ参加者の皆さんに感謝申し上げます。